

JAが農地を守る

—JA氷見市・JA出資型農業生産法人
(株)JAアグリひみ(富山県)の取り組み—

研究員 小針美和

1 設立の経緯

富山県氷見市は、能登半島の付け根、石川県との県境に位置する。良質なコシヒカリの生産地であるが、管内の多くが中山間地域ということもあり、地域・農業の高齢化が進んで自ら営農を継続できない組合員が増加している。しかし、認定農業者や集落営農の構成員も高齢化しており、さらに農産物価格の低迷をはじめとして経営環境が悪化しているもとでは、担い手側にもこれ以上農地を引き受けるのは難しいという限界感があり、「JAに農地を任せたい」という要望が組合員・地域のなかで高まっていた。そのような状況のもと、04年に、ひとつの支所で営農指導員、組合員で構成した任意組合により受託を開始、翌05年にはJAとして「農業支援センター」を設置し、5haの受託を行っていた。

このような組合員のニーズがさらに強まってくるなかで「JAが農地を守るという強い使命感」のもと、この支援センターを前身として、中核農家や集落営農組織と連携し、水田の請負耕作やハトムギなどの地域振興作物の栽培、販売に取り組む(株)JAアグリひみ(以下「アグリひみ」)が06年4月に設立された。

また、アグリひみの設立に合わせて、JA本体の営農指導事業や利用事業の再編もなされた。育苗管理やカントリーエレベータ、堆肥舎の管理、農業機械等)の補足支援、全面受託等をアグリひみが行うことで職員の通年作業体制を確立し、アグリひみを核として、JA

が地域農業振興の中心的役割を担う体制の整備が図られた。

2 地域農業振興の取り組み

農業振興の主な取り組みとしては、農地利用調整・農作業受託、ハトムギの買取りと生産支援、「氷見牛」の生産、循環型農業の確立があげられる。

農地利用調整・農作業受託

アグリひみでは、現在、水稻、ハトムギを約15ha生産し、延べ面積で約300haの作業を受託している。ただし、農家から出された委託希望をそのまま直接アグリひみが引き受けるのではない。農地・農作業を受託するにあたっては、まず、農地保有合理化法人の資格をもつJAをはじめ、関係機関等で組織する「農地・農作業受委託委員会」のなかで担い手農家や集落組織に効率的かつ公平に利用集積がなされるように調整したうえで、彼らが担いきれない農地、農作業をアグリひみが請け負う形をとっている。営農の継続が危ぶまれる集落営農や中核農家の経営のなかには、“10が必要なところ9まで到達している、あと1の部分の手をさし伸べれば継続できる”というケースも少なくない。まずは、その足りない部分をサポートし、担い手を支えることが、地域のなかでのアグリひみの大きな役割のひとつとなっている。

ハトムギの買取りと生産支援

担い手、特に集落営農に対する支援として

重要な位置を占めているのが転作への取組み、ハトムギのJAによる全量買取りと生産支援である。農商工連携の第1号としても有名なペットボトル「氷見はとむぎ茶」等の原料となるハトムギは、JAが生産者から全量を買上げ、アグリひみで加工される。その際の買取価格はkgあたり700円と、原穀としての一般的な取引価格250～300円の2倍以上であり、自社加工により得られる収益を生産者に還元している。また、ハトムギ栽培用の機械もアグリひみが保有し、リース方式で貸し出す仕組みになっているほか、栽培指導・作業受託等、様々な形でアグリひみが携わり、生産支援をしている。

管内は中山間地域で圃場が小さく、湿田も多いことから、良質の麦、大豆を生産することが難しい。そのため、水田経営所得安定対策に加入してもその交付金のみでは赤字であるが、ハトムギの生産により収入が確保され、経営が支えられているケースも少なくない。

「氷見牛」の生産、循環型農業の確立

また、氷見市には14戸の畜産農家があり、飼養頭数は約1200頭で推移している。氷見産の牛肉は「氷見牛」として市場からも高い評価を受けているが、農家の高齢化等により生産も伸び悩んでおり、需要に応じきれない状況となっている。

そこでアグリひみでは、継続が困難となった畜産農家から牛を引き取る等して06年から畜産部門にも取り組み、和牛繁殖肥育一貫体系による氷見牛の生産基盤の確立を目指している。現在では、肥育牛86頭、繁殖牛25頭を飼養しており、本年からは本格的な出荷も始まる。繁殖牛については、県の事業等も活用して、耕作放棄地や原野への放牧の管理・支

援を行っている。

また、粗飼料については、飼料用稲の栽培、および回収した稲わらを原料とした稲発酵粗飼料の生産による自給飼料の確保により、飼料自給率の向上と経費削減を図っている。本年からは飼料用稲の作付けを3.5haに拡大するほか、ハトムギ加工で発生する残渣^{ざんさ}についても、飼料としての利用が検討されている。

さらに、アグリひみの牛舎をはじめ、氷見牛の糞尿はJAの堆肥舎を経由して堆肥として地域の水田に還元されており、耕畜連携・循環型の農業体系の確立が図られている。

3 地域農業の司令塔として

このように、JA氷見市では、アグリひみを核として、農地の利用調整や作業受託、ハトムギ・氷見牛等の生産体系および循環型農業の確立を目指すことを通じて、JAが中心となった農業振興を積極的に推進している。そのもとで、ハトムギ、氷見牛をはじめとした氷見産の農産物を原料とした商品化、ブランド確立・強化のための取組みを両輪で進めることで地域農業の確立を図っている。設立の趣旨にある「JAが地域農業の司令塔としての役割を果たす」取組みを実践している。

JA氷見市では、現実問題として、担い手を含め管内の農家組合員のリタイアはさらに加速するので、今後、地域の農業維持・管理のために、このような仕組みと拠点としての組織が管内の地域ブロックごとにそれぞれ必要となってくるのではないかと考えている。そして、アグリひみをモデルケースとして、次の展開を考えていきたいとの意向をもっている。今後の取組みに注目していきたい。

(こばり みわ)